

## 「絵仏師良秀」傍線注釈

●配った現代語訳をもとにし、傍線注釈をすること。なお、常用漢字は必ず漢字に直して記すこと。  
 ●正格活用の動詞を    で囲み、活用形をその左側に記しなさい。

①これも今は昔、絵仏師良秀といふありけり。

連体形

②家の隣より火出で来て、風おしおほひてせめければ、逃げ出でて、  
 大路へ出でにけり。

③人の書かする仏もおはしけり。

④また、衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけり。

⑤それも知らず、ただ逃げ出でたるをことにして、向かひのつらに立てり。

⑥見れば、すでにわが家に移りて、煙・炎くゆりけるまで、おほか

た、向かひのつらに立ちて、眺めければ、

⑦「あさましきこと。」とて、人ども来とぶらひけれど、さわがず。

⑧「いかに。」と人言ひければ、向かひに立ちて、家の焼くるを見て、

うちうなづきて、時々笑ひけり。

⑨「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろく書きけるものかな。」  
と言ふときに、

⑩とぶらひに来たる者ども、「こはいかに、かくては立ちたまへるぞ。

⑪あさましきことかな。もののつきたまへるか。」と言ひければ、

⑫「なんでふもののつくべきぞ。年ごろ、不動尊の火炎をあしく書き  
けるなり。

⑬今見れば、かうこそ燃えけれど、心得つるなり。これこそせうとくよ。

⑭この道を立てて世にあらんには、仏だによく書きたてまつらば、百  
千の家も出で来なん。

⑮わたらうたちこそ、させる能もおはせねば、ものとも惜しみたまへ。」

と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。

⑯そのちにや、良秀がよぢり不動とて、今に人々めで合へり。